

# 平成 26 年度 第 1 回エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ

## 議事概要

日 時：平成 26 年 7 月 12 日（土） 13：00～16：25

会 場：釧路地方合同庁舎 5 階 第 1 会議室

- 議 事：（1）H25 シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果について  
（2）H26 シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画案について  
（3）植生指標について（報告）  
（4）隣接地区の捕獲事業について  
（5）エゾシカ A 地区（ルシャ地区）の季節移動調査等について  
（6）知床国立公園知床生態系維持回復事業計画の改定について  
（7）その他

出席者：以下出席者名簿の通り

<出席者名簿>

エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ 委員		
弘前大学 白神自然環境研究所 教授		石川 幸男（欠席）
北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 研究主幹		宇野 裕之
東京農工大学 共生科学技術研究院 教授（WG座長）		梶 光一
森林総合研究所 北海道支所長		牧野 俊一
岐阜大学 応用生物科学部獣医学講座 教授		鈴木 正嗣（欠席）
財団法人自然環境研究センター 研究主幹		常田 邦彦
北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 企画課長		間野 勉
北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 教授		日浦 勉
横浜国立大学 環境情報研究院 教授		松田 裕之
酪農学園大学 環境システム学部 地域環境学科 教授		宮木 雅美
斜里町立知床博物館 館長		山中 正実
（以上50音順）		
北海道大学名誉教授（科学委員会委員長）		大泰司 紀之
関係行政機関		
斜里町 総務部環境課	課長	岡田 秀明
同	自然環境係長	高橋 誠司
羅臼町 水産商工観光課	課長補佐	田澤 道広
同	主任	遠山 和幸

知床世界自然遺産地域科学委員会 エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ 事務局		
環境省 釧路自然環境事務所	所長	西山 理行
同	次長	中島 慶次
同 国立公園・保全整備課	整備計画専門官	寺内 聡
同	係員	小池 大二郎
同 ウトロ自然保護官事務所	自然保護官	松永 暁道
	係員	永瀬 拓
同 羅臼自然保護官事務所	自然保護官	高瀬 裕貴
北海道森林管理局 計画保全部	自然遺産保全調整官	三橋 博之
同 網走南部森林管理署	森林技術指導官	根本 治
同 根釧東部森林管理署	署長	倉田 徹也
同 知床森林生態系保全センター	所長	荻原 裕
同	自然再生指導官	上野 利康
同		今福 寛子
同		正月 公志
北海道 環境生活部環境局 エゾシカ対策課	主査（捕獲対策）	木村 和徳
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課	主査（エゾシカ）	吉田 英明
知床世界自然遺産地域科学委員会 エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ 運営事務局		
公益財団法人 知床財団	事務局次長	寺山 元
同	事務局次長	新藤 薫
同	保護管理研究係主任	石名坂 豪
同	羅臼地区事業係	白柳 正隆
同	保護管理研究係	土屋 誠一郎

## 開会挨拶

西山：平成26年度 エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ（以下、シカWG）第1回会議にご出席頂き、お礼申し上げます。皆様のご尽力のお陰で知床におけるエゾシカ対策は着々と進んでおり、目に見える形で成果が出始めている。昨年5月の終わりには、鳥獣法改正の本格的な議論を前に中央環境審議会鳥獣小委員会にも視察頂き、今年3月には国会での鳥獣法審議の前に石原環境大臣にも現場を見て頂いている。その後、7月初旬には環境省の北川副大臣と井上副大臣に視察して頂いている。いずれからも知床のシカ対策は高い評価を得ている。

本日はH25シカ年度の報告のほかに、ルシャ地区の個体数調整を検討するための季節移動調査に関する報告、ウトロ周辺の林野庁事業について等ご議論いただく予定である。3時間程度を予定している。宜しく願いたい。

## 議事

梶座長：それでは、さっそく議題に入りたい。議題1のH25シカ年度実行計画の実施結果について事務局より説明願う。

### 議事1 H25シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果について

- ・資料1-1「H25シカ年度実行計画の実施結果」を資料に基づき環境省寺内が説明。
  - ✓管理事業である防御的手法、越冬環境改変、個体数調整の実施結果について説明。
  - ✓各地域におけるモニタリング調査の結果について説明。
- ・資料1-2「H25シカ年度遺産地域内エゾシカ個体数調整実施結果」を資料に基づき知床財団野別が説明。
  - ✓ルサー相泊地区では、囲いわなと流し猟式SSで計208頭を捕獲。幌別一岩尾別地区では、大型囲いわなと囲いわな、流し猟式SSで計207頭を捕獲。
  - ✓初年度だった相泊囲いわなの捕獲効率は高かったが、4年目となるルサ囲いわなの捕獲効率は低かった。
  - ✓ルサー相泊地区の流し猟式SSは2～3月にSS実施区間にいるシカが高標高地等へ移動して捕獲数が少なくなった。そのため、今後は実施期間を12～1月および4月に集中させることを検討している。
  - ✓幌別一岩尾別地区における仕切り柵では、1～3月の捕獲数は低調だったが、4月には1回あたりの捕獲数が増加、21頭を捕獲した日もあった。
  - ✓岩尾別囲いわなの捕獲数は前年から著しく減少、幌別囲いわなも当初予測より捕獲数が少なかった。
  - ✓幌別一岩尾別地区の流し猟式SSは初回捕獲時にヒグマが出没したため1回でとりやめた。
  - ✓知床岬地区では、流氷明けに船舶を利用した日帰り捕獲を2回実施し、計9頭を捕獲。捕獲数は過去最少となった。シカの越冬数減少と流氷停滞による実施時期の遅延が関連していると推定。
- ・資料1-3「H25シカ年度隣接地区エゾシカ捕獲結果」を資料に基づき知床森林生態系保全センター上野氏が説明。

- ✓隣接地区のウトロで囲いわなによる捕獲を実施し、計 41 頭を捕獲した。全期間を通じて、囲いわなの捕獲ゲート入口までの誘引は出来ていたが、捕獲数は伸び悩んだ。既存の防鹿柵に併設させる形で囲いわなを設置したこと、囲いわなに使用した化粧合板の光沢面にシカの影が映り込むことでシカに警戒心を抱かせた可能性が考えられた。
  - ✓囲いわなの改良を実施し、今年度も国設キャンプ場での捕獲を実施予定。4月と5月については、国設キャンプ場ではなく、防鹿柵より離れた箇所での小規模囲いわなによる捕獲を検討。
- ・資料 1-4「H25 シカ年度モニタリング事業結果（シカ個体数関連）」を資料に基づき知床財団石名坂が説明。
- ✓遺産地域の標高 300m 以下全域において、シカのヘリコプターカウント調査を 3 月に実施。計 199 群、935 頭を発見。知床岬地区の発見頭数は 279 頭、前年より 86%増加。ルサー相泊地区は発見頭数 137 頭、前年から 36%減少。幌別ー岩尾別地区は発見頭数 292 頭、前年から 7%減少。ルシャ地区は発見頭数 227 頭、前回調査時（2011 年）から 63%減少。
  - ✓今春のルサー相泊地区のスポットライトセンサスは 4/29～5/4 に実施し、発見頭数平均 64 頭（6.3 頭/km）、100 メス比は 10.2 であった。
  - ✓今春の幌別ー岩尾別地区のスポットライトセンサスは 4/23～27 に実施し、幌別 15.3 頭/km、岩尾別 3.5 頭/km となった。岩尾別の数字が低いのは、岩尾別地区を中心に捕獲事業を行っている結果と推定。
  - ✓真鯉地区の日中カウント調査は、最大発見頭数 472 頭を 3 月 12 日に記録した。国指定鳥獣保護区内における発見頭数が増加傾向。

梶座長：資料について説明頂いた。シカの捕獲結果とモニタリング等事業について質問はあるか。

宇野：資料 1-2 について伺いたい。相泊囲いわなは初年度で好調だったようだが、自動落下式ゲートは使用したか。自動落下式ゲート、特にセンサーに対する雪の影響は労力的にどうだったか。

白 柳：相泊の囲いわなは自動落下式ゲート「かぞえもん」を使用した。センサー部には工夫を凝らした。フレキシブルに動く腕にセンサーを取り付け、センサー角度の調整を容易に行えるようにした。また、風向きを考慮して吹き溜まりにくい場所に捕獲ゲートを配置した。

上 野：森林管理局が実施した囲いわなも自動落下式ゲート「かぞえもん」を使用した。かぞえもんは寒冷地仕様になっていないため、さまざまなトラブルが発生するのが現状である。トラブルを回避するためには、バッテリーではなく電源を確保する必要がある。かぞえもんの改良に期待しているが、今年度はかぞえもんを使用しない自動落下式ゲートを検討している。

宇 野：森林管理局に伺いたい。昨年度の捕獲事業について、実行主体、捕獲主体は知床財団だったのか。他の事業者が行ったのか。

上 野：請負は知床財団である。

宇野：今後も捕獲事業を継続すると思うが、囲いわなの場合は慣らし（餌付け誘引）にどのくらいの期間を要したか、なども重要である。資料 1-2 と比較できるように資料を取り纏めて頂きたい。

上野：今後はそのように対応したい。

山中：資料 1-2 について、ルサ囲いわなは捕獲効率が顕著に低下している。ルサ囲いわなは国道から奥まった場所に位置する。積雪も多く、強烈な風が吹くということで、囲いわなの維持管理が大変だと思う。96 日間で 14 頭のみ捕獲ということであれば捕獲効率が悪く、大変な苦労があると思う。ルサ FH 裏と囲いわなまでの取り付け道路沿いで餌づけを行い、流し猟式 SS を実施すれば、より低労力でシカを捕獲できると思うがいかがか。

また、ルサー相泊地区における流し猟式 SS を開始して 3 年が経過した。流し猟式 SS の際に何頭以下の群れに対して発砲しているか、またスマートディア化の傾向を教えてください。

白柳：昨年度、規模を大幅に縮小した頑丈な囲いわなをルサ囲いわなとして設置した。囲いわなが小さくなったことで管理労力は小さくなり、除雪労力も大幅に軽減された。頑丈な囲いわなをせっかく設置したので、今年度も運用したいと考えている。

流し猟式 SS だが、原則 3 頭以下の群れを捕獲対象としている。しかし、シカが捕獲車両に近寄ってくるなど十分に餌付け誘引されている場合、4 頭や 5 頭の群れに思い切って発砲したケースもある。

スマートディア化について、耳タグを装着した個体を含む群れに対して発砲したケースがあった。耳タグを装着した個体が流し猟式 SS 実施時や餌付け誘引時に出現しなくなるというようなことはなく、むしろ同じような場所に出てきていた。

梶座長：ルサ囲いわなは継続ということだったが、捕獲効率をあげるために工夫の余地はあるか。

野別：ルサー相泊地区で捕獲されているシカは、ルサ川の両岸の標高の高い場所からきているシカである。流し猟式 SS で捕獲しているシカの群れとは異なると考えている。4 月の融雪時期、捕獲ゲートに装着した自動カメラに一度に十数頭のシカが撮影されたが、捕獲されない状況があった。このようなシカを捕獲できれば捕獲効率は上がると考えている。

寺内：補足したい。積雪パターンも捕獲効率に影響を与えていると思う。1 月と 2 月は積雪が少なかったため、餌付け誘引がうまくいかなかった。例年の積雪パターンであればもうすこしシカを捕獲できたと考えている。その後、2 月下旬以降は逆に積雪が多すぎたため、強風でササが雪面から露出しやすい高標高域にシカが移動してしまった。これも例年通りの積雪状況であればもうすこしシカを捕獲できた可能性があると考えている。今後に期待を残している。

梶座長：流し猟式 SS は、漁業活動が活発化する時間帯を避けて実施するという点でいいと思うが、シカの採食活動が活発なのは朝方と夕方である。もともと漁業者が動き回る時間帯とずれていると思う。終日通行止めにする事で許可を得ていると思うが（※注）、捕獲時の実施時間帯について

柔軟な対応はできるか。

また現在、鳥獣法の改正が検討されているが、薄明薄暮に実施するといったように、法改正によって効率よく捕獲ができるようになる余地はあるか。

※注) 終日ではなく限定した時間帯(13~16時)のみ、道路管理者の協力で通行止めとした。

寺内：時期によって捕獲の実施時間帯を変更するのは安全管理上好ましくないと考え、1月から4月まで同じ時間帯でルサー相泊地区の流し猟式SSを実施した。今回の結果をうけて、むしろ安全管理上も実施時間帯をうしろに(漁業者が少ない遅めの時間帯に)変更したほうが良いと感じた。今後調整したい。

法改正に伴う夜間発砲に関しては、知事の認定をうけた事業者が有害捕獲を行う場合に夜間の発砲が可能になるということだが、いつからこの制度が運用開始になるのか不透明である。また、夜間発砲に関しては大変な調整が新たに必要になると思う。可能であれば実施したいという考えがある。今後調整したい。

梶座長：捕獲事業以外に何かあるか。

田澤：資料1-1の6ページ、高標高植生調査の羅臼湖に関する記述について、「嗜好性の高い植物がもともと少ない」のではなく、「もともと嗜好性の高い植物はあったが、すでに少なくなっている状態で更なる痕跡はわずか」ということの間違いだと思う。

寺内：前回の調査では、過去の植生調査と比較して植生が変化しているという記述がたしかにあったと記憶している。修正する。

田澤：資料1-1の7ページ、鳥類相モニタリング調査について、「過去に確認の無いウグイス、エゾセンニュウ、シジュウカラ等が確認された」とあるが、知床岬で過去に確認されていないということではなく、このシリーズの調査で確認されていないということでしょうか。

寺内：その通りである。過去の、同じ手法の調査では確認されていないということである。

間野：資料1-1の7ページ、シカ自然死亡について確認したい。自然死亡数は全体に少ないということだが、ヘリカウント調査で得られた数字は個体数を反映していると思うが、自然死亡数に関しては母数が増えれば自然死亡数が減少すると思う。自然死亡数が全体の結果の中でどのように解釈されるのか、補足説明はあるか。

石名坂：確かに同じ死亡率でも、シカの母数が増えれば死亡数は減少していく。解釈の記載がなく申し訳ない。今年の春に関しては、全般にシカの栄養状態は悪くなかった。一昨年は、生き残ったメス成獣も頬がげっそりしている印象を受け、子ジカも含めて一定の死亡数があった。今冬は見落としを考慮しても自然死亡は少なかったという印象を持っている。定量的な話が出来なくて申し訳ないが、シカにとってそれほど厳しい冬ではなかったと考えている。

宇野：資料 1-1 の 5 ページ、密度操作対象地域の知床岬地区イネ科草本等調査区について、「柵内外とも、アメリカオニアザミはほとんど見られない」という記述がある。アメリカオニアザミについて、これまで様々な対策を取ってきた。刈り取りを行い、シカの侵入防止柵を設置し、他の植物が回復してきたため見られなくなったと思う。生態系維持回復事業計画の見直し案などでも、アメリカオニアザミの文言や記述が消えていっているが、どのような対策を行って、何年目からほとんど見られなくなったかを総括のために記録してほしい。外来生物が確認されなくなったのは、シカ対策事業の効果でもある。情報があれば、何年目くらいで消失したかを教えてほしい。

寺内：資料 3 にデータがある。後ほど説明したい。

山中：2 点ある。資料 1-2 の 6 ページ、幌別ー岩尾別地区における流し猟式 SS について、実施 1 回、捕獲数 2 頭でとりやめたとのこと。まとめとして、「本手法はヒグマの冬眠期間中であれば有効であると考えられる」とあるが、岩尾別河口の囲いわなとバッティングしないか。またヒグマが捕獲したシカを持ち去るようなことがあっても、流し猟式 SS を実施すればよいと考えるがどうか。クマが持っていけば無理に回収する必要はない上、どうしても回収をしたければ威嚇射撃で追い払って回収を行えばよいと思う。

石名坂氏から資料説明のあったヘリコプターカウントの結果は非常に興味深い。シカの捕獲を行っていないにもかかわらず、ルシャ地区では前回調査時から発見頭数が 63% も減少している。シカに GPS テレメを装着し、周辺地区との往来を調べる季節移動調査を今年度から開始していると聞いている。ルサ地区では 5 年間で 600 頭近いシカを捕獲している。もしルサ地区との往来が頻繁にあるならば、ルサ地区での捕獲がルシャ地区のシカの個体数減少に貢献している可能性が考えられる。季節移動調査の結果からその点を検討して頂きたい。

私が独自で行うと言っていて結局実施できていないが、ルシャ地区のシカの妊娠率を調べることは重要だと考えている。今年も調査を行っているが、今のところメス成獣 100 頭当たりの子の数は 0 である。ヒグマに子ジカが捕食されることによる初期死亡もあると思うが、状況によっては高齢のシカになっていて妊娠率が下がっていることも影響しているかもしれないと考えている。

石名坂：岩尾別地区における流し猟式 SS についてだが、オペレーション上の不具合があった。直前に実施した餌付け時までにはクマの明瞭な痕跡が確認されていなかったため、ヒグマを追い払う体制なしで捕獲を行った。その結果、ヒグマに撃ったシカを奪われてしまった。岩尾別川河口には岩尾別ふ化場があり、居住者がいる。ヒグマにシカを取られることが何度も続くと、住民生活の安全に影響が出ると考えて中止した。一方、実施した際のシカの反応から、ヒグマが冬眠している期間については、捕獲手法として有効であると感じた。岩尾別河口における流し猟式 SS を実施する場合は囲いわなと同時並行ではなく、囲いわなを中止して流し猟式 SS に手法を切り替えて実施するという意味である。2 年目となる岩尾別河口の囲いわなは捕獲効率が落ちている。トラップシャイのような状況が発生していると考えられる。その対策として流し猟式 SS が有効だと考えている。

ルシャ地区の季節移動調査については、山中委員の言うような観点で良いデータが取ればと期待している。これについては資料 5 で詳しく説明したい。

## 議事 2 H26 シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画案について

・資料 2「H26 シカ年度知床半島エゾシカ保護管理計画実行計画（案）」を資料に基づき環境省寺内  
が説明。1.32.40

- ✓モニタリング調査として、今年度は斜里側で海岸植生・採食圧調査を実施予定である。
- ✓今年度についても遺産地域内については航空カウント調査を実施予定である。
- ✓隣接地区（真鯉・春刈古丹）では、シカ生息動向調査としてカメラトラップ調査を実施予定である。
- ✓知床岬地区と幌別一岩尾別地区では、酪農学園大学の独自事業として鳥類の録音調査とラインセンサスを実施予定である。
- ✓遺産地域内における個体数調整の中長期目標に関して、知床岬は第1段階目標を達成できていない。航空カウントで確認された生息頭数が増加しているが、これは捕獲数の減少と周辺地域からのシカの流入が原因と考えている。ルサー相泊地区は、航空カウント実施後の4月も捕獲を行っており、第1段階目標に近づいてきていると考えている。幌別一岩尾別地区は第1段階目標を達成した可能性があると考えている。

宮 木：1 ページ目の越冬環境改変について、「公共事業等における法面植栽等についてはエゾシカの嗜好性の低い在来種の利用を推進する」とあるが、牧草を使用せず緑化する、牧草の利用を禁止するということか。また推進するとあるが、ある程度の目途はあるのか。

寺 内：現在、新たに牧草の芝を張るといふかたちにはしないようお願いしている。もともと牧草が含まれているという問題はあるが、表土を取り置いて、法面造成後に吹き付ける方法を取ってもらっている。新たに牧草の法面を作らないという方法が現実的と考えている。将来的に在来種の種苗が手に入るようになれば、それを活用したいと考えている。

宮 木：在来種の嗜好性の低いものを推進すると書いているが、現状ではハンゴンソウやフッキソウぐらいしか見当たらない。目途がなければこのような書き方は書きすぎと感じた。

寺 内：現時点ではやはり難しいと思う。国交省ではそのような研究もされていると聞いている。技術的に可能になれば取り入れていきたいと考えている。

宇 野：2 ページ目の航空カウントについて、表にはセスナまたはヘリコプターと書いてあるが、今年と同じように遺産地域をヘリコプターでカウントする予定があるのか。以前のようにセスナで写真を撮影するだけなのか予定を聞きたい。

寺 内：セスナで調査を実施できるのは、知床岬の先端部だけである。全域を対象にヘリコプターカウント調査を行う場合には、知床岬地区でもヘリコプターを使用する。その際は、セスナを使用する場合に準じた方法で調査を行っている。

宇 野：密度操作実験を行っている地区を対象に、ヘリコプターを使用した密度推定を行う予定は今年度あるか。

寺 内：実施予定である。

宇 野：密度操作の実施計画については 10 月に議論するということだったが、知床岬地区はせっかくシカの個体数を減らしたが、赤岩側にメスの集団がいる、知床岬地区にオスが流入してきているという状況がありそうなので、ヘリコプターを使用する調査が予定されているのであれば、ヘリコプターを使用した捕獲計画を検討してはいかがか。

寺 内：検討したい。

間 野 6 ページの遺産地域内における個体数調整の中長期目標について、地域毎に捕獲頭数（実績値）と目標捕獲頭数（目標値）が書いてあるが、グレーのセルについては実績の捕獲頭数が書いてあるという理解でよいか。

寺 内：グレーのセルは実績値である。

間 野：目標はどこにでているか。

寺 内：目標値は白いセル、H26 シカ年度以降に入れるべきだが、数字の検討を行っていない。

間 野：私が伺いたかったのは、過去の目標に対してどれだけ達成していたかをこの表で確認できればと考えて質問させて頂いた。

寺 内：現時点で存在するのはいずれの地域も第一段階の目標のみである。水色のセルで書いた数字である。

間 野：承知した。

梶座長：過去についても第一段階目標が生きているということである。過去については終わってしまったため省略してあるが、水色のセルが伸びてもいいということ。間野さんが言及しているのは、年度毎に目標捕獲数があつて、それがどうだったかということである。

寺 内：表の作りが悪くて申し訳ない。ルサー相泊地区で目標値を作成し始めたのがいつからか、手元に過去の資料がないため判然としないが、昨シカ年度の目標値は、ルサー相泊地区で 220 頭に対して捕獲数は 208 頭、幌別一岩尾別地区は 400 頭に対して捕獲数は 207 頭という結果であった。

梶座長：試行段階のときに 3 年間で半減するという計画を作り、メスのシカを何頭捕獲するかという議論をしていたと思う。

間 野：その値も合わせて出した方がよいと思う。

寺 内：検討したい。

### 議事 3 植生指標について（報告）

- ・資料 3「知床岬地区におけるエゾシカに関する植生指標について」を資料に基づき環境省寺内の説明。
- ✓エゾシカによる植生への影響と、個体数調整の成果としての植生回復を知床岬地区において評価するための植生指標が完成した。
- ✓植生指標としては、草原現存量の増加（1～3 年程度）、嗜好性植物の回復（4～7 年程度）、希少種の回復（8～10 年程度）、植生としての回復段階の 4 段階に区分することが適当と考えた。
- ✓ササ草原における植生は、対照区が若干遅れつつ、金属ケージ内と対照区とともに回復してきている。またアメリカオニアザミについては、金属ケージ内で 2010 年以降は確認できていない状況。対照区でも 2012 年以降は確認できていない状況。

梶座長：宮木委員、日浦委員から補足はあるか。

宮 木：アメリカオニアザミについて補足したい。柵の中と外でどのように変化するかモニタリングしている。アメリカオニアザミは 1 回繁殖型、3・4 年で花茎を立ち上げて一生を終える。柵を設置して 1 年目は柵の中でも開花したが、2 年目になると花は出なくなった。実生が育たなくなった。他の草本が茂って暗くなったからだと思う。裸地の場合は強いが、植物同士の競争には弱いというのがアメリカオニアザミの特徴である。そのような意味で初期段階の指標として使える可能性がある。

また調査上の課題だが、林野庁と環境省で調査の仕方、面積が異なる。種の多様性を見る際などは同じ単位、同じ面積で比較する必要がある。ぜひ同じような方法で調査して頂きたい。今年度からでも仕様書の中で方法を明記し、共通して結果を比較できるようにしてほしい。これからどのように植生が回復するか、場所間の比較をする必要がある。

梶座長：森林管理局と環境省で手分けして行っている調査がある。仕様書を統一することについて早急な対応をお願いしたい。

日 浦：植生指標に直接は関わらないが、8 月に梶座長の科研費調査グループと知床岬に調査に入る。シカの個体数変動に伴って何がどのように変わっているのか、データの蓄積が 30 年ほどあり、長期のトレンドを直接的に見られるということで期待している。それに加えて、これまでのモニタリングで調査されていない別の側面からデータを取りたいと考えている。物質循環に絡んだもので、植物のようにすぐに変化しないが、蓄積も含めて徐々に変化していくものである。今回は一断面だが、ゆっくりだが大事な変化をシカ柵の内外で比較する。幌別台地上でも同様に調査し、シカの低密度状態を維持した際にどのように推移するか示していきたいと考えている。

梶座長：具体的には窒素とリンである。シカの糞を媒介とした循環を促進して、植物体に取り込まれているだろうという仮説を日浦委員が立てている。

## 休憩 15時00分まで休憩

梶座長：前半部分を振り返って確認したいことはあるか。

山中：実行計画案について、毎年この機会に可猟区案の提示があったと思う。紹介して頂きたい。またそれに関して、昨年のWGで羅臼町の要望が道本庁まで伝わっていないというような問題があったが、今回は反映されたかどうかを聞きたい。斜里町については先日の地元の検討会で中断式の可猟期間を従来同様継続との判断を下したが、国指定鳥獣保護区内と中断式狩猟を行っている隣接地区は、世界遺産地域を含めてもシカの最大の越冬地になってしまっている。まったく捕獲圧がかかっていない場所を中心にかなり大きなシカの個体群がいるが、これを叩くための有効な方法がない中、希少猛禽類に配慮した中断式狩猟を行っている。地元の判断をそのまま追認ということではなく、狩猟期間の3月までの延長について、シカWGから何らかの助言が必要かと思う。狩猟について「調整中」と記載されているが、ご回答いただきたい。

また10月の次回WGで具体的な捕獲手法について検討を行うということだが、それまでにやるべきことがある。知床岬地区は莫大な予算をかけて建設した仕切り柵、これは希少猛禽類の営巣地を避けるために設置したが、希少猛禽類が逆に柵内に引っ越してきており、これにどのように対応するのかという課題がある。またシカの生息密度が低くなってきているので、継続的に低密度を維持するための手法検討として、冬場だけでなく夏や秋の少人数での捕獲を検討する必要がある。試行的な調査事業や試験的捕獲を10月までに配置すべきだと思うがどうか。意見として申し上げたい。

梶座長：まず北海道の可猟区の状況についていかがか。

木村：先日の推進委員会で提示させてもらったが、羅臼町は1月末まで、斜里町については10月1日から2月28日までのあいだに中断期間を2回設けるという設定にさせてもらった。羅臼町からは延長の要望があったが、別海町や中標津町など、近隣町村と合わせた狩猟期間に設定させてもらった。

山中：斜里町側について、中断期間を行っている可猟区域に集中している個体群をなんとかすべきだと考えている。地元の判断はあるが、いろいろと意見が分かれる中で決断しかねている状況もある。実施可能かどうかは別として、科学委員会として助言や提言を行うべきだと思うがいかがか。

梶座長：山中委員からこの話が毎回提案されている。これまでは地域の判断に委ねるという形で来たが、鳥獣法が改正されて来年度から施行される。狩猟というオプションが使えない中では狩猟以外の選択肢もある。隣接地区に高密度な場所が残っている現状がある。管理計画を作る際は隣接地区がセンシティブな問題となり、北海道のシカ管理計画との整合性が問われた。実現可能な方向性を検討して欲しい。地域の中でどのような論点があるのか教えて頂きたい。

田澤：羅臼町からは3月末まで狩猟期間を延長して欲しいという要望を出している。昨年度と異なり今年度は道庁からの返答はあったが、返答内容は先ほどの通りである。羅臼町民の98%はシカを何

とかしてほしいと思っている。2%はシマフクロウもいるなあという状況だ。去年も出したが、羅臼町としてはシカについて最大限捕獲期間を延ばしてほしいという意見を出した。根室管内の他の市町も似た状況だと思う。

岡 田：道から素案という形で照会がきて、それをもとに関係機関で集まり意見をまとめて、地域としての意見を道にあげるということを毎年行っている。山中委員からもあったが、斜里町では全道で唯一の中断期間が設けられている。中断期間の設定について様々な意見がある。たとえば猟友会からは、2週間おきに捕獲できたりできなかったりするのには分りにくいという意見、中断期間を設定しながらも2月末で狩猟期間が終了してしまうので、可能であれば3月末まで中断期間なしで捕獲したいという意見が出ている。希少猛禽類関係者からは、2月末までが限界である、3月もハンターが山林に立ち入ることは許容できない、2月末という許容限界の中でも一律に継続的に捕獲できる状態は、人の立ち入りによるプレッシャーがかかりつづけるので、可猟期間は中断期間を設けて2月末までが限界という意見が出ている。

シカの個体数が増えていて何とかしなければならぬという認識は共通している。異論は出ない。しかしそのためにどのような手法でシカを減らすかということについて、様々な意見があり、まとまらない。最終的に町からは、現行通り2月末まで中断期間を設けるという意見を出した。3月の捕獲に関しては、希少猛禽類関係者から不特定の人物が立ち入ることがネックである、希少猛禽類に配慮しながら統制されたチームで捕獲を実施するというのであれば認めるという話があった。そのような中で、3月の調整が難しい時期に森林管理局の事業として銃と囲いわなによる方法で捕獲を進める準備がある、狩猟は2月末まで、3月以降は試行的に森林管理局事業で行うという話が出てきた。森林管理局事業でなるべく多数のシカを捕獲してもらうことで、何とか乗り切っていきたいということで今回は話をまとめた。

梶座長：具体的な話が進んでいると認識した。羅臼町の要望に対して、北海道としては根室管内と狩猟期間を合わせたということだったが、知床世界自然遺産の隣接地区として羅臼町のシカの問題を考えて頂いた方が良いので、その点よろしく検討をお願いしたい。

山中委員の言われた10月までの岬の検討要件について、今日この場で決定することは難しいと思うので課題を整理してもらえるか。

山 中：わかりにくかったと思うが、希少猛禽類の問題が出てきている。宇野委員からヘリコプターを再び使用してシカをしっかりと捕獲するべきだとの意見があったが、捕獲エリアの真ん中に希少猛禽類が自ら巣を移動させてきている。従来手法で捕獲を強化することは厳しい可能性がある。むしろ希少猛禽類が繁殖していない夏や秋に捕獲する方法、今後の継続的な低コスト手法、実験的なものを検討すべきだと思い、提案させて頂いた。

梶座長：どこまで希少猛禽類に配慮したらいいのかということもあるが、淡々と粛々とやるのが良いと思う。科学委員会の場合でも次のステージを考えるべきという議論が出始めている。つまり、どのように低コストで低密度状態を長期的に維持するか。現状はその段階には早いですが、考えるステージには来たと思う。今後の課題としたい。

## 議事 4

### 隣接地区の捕獲事業について

- ・資料 4「隣接地区におけるエゾシカ捕獲事業計画（案）」を資料に基づき北海道森林管理局上野氏が説明。

✓平成 25 年度からウトロ地区でシカの捕獲事業等を開始した森林管理局では、平成 26 年度から捕獲の規模と手法を拡大し、ウトロ地区からと真鯉地区にかけての捕獲を強化する。

✓捕獲方法を囲いわなを主体として、冬期にシカの生息密度が高い海岸沿いに約 1 km 間隔で配置することを基本とする。平成 26 年度の囲いわな設置数は、ウトロ地区で 4 基、遠音別地区で 3 基、真鯉地区で 2 基の計 9 基、平成 27 年と 28 年はウトロ地区で 6 基、遠音別地区で 5 基、真鯉地区で 2 基の計 13 基を予定している。銃による捕獲は平成 26 年に 1 カ所、平成 27 年と平成 28 年に 2 カ所で実施を予定している。

山 中：先ほども話題になったが、今は半島内最大の越冬地であるので、これだけ大規模な捕獲を検討していただいていることは素晴らしい。ぜひ実のあるかたちで、猛禽類にあまり配慮し過ぎることのないよう捕獲を行っていただきたい。その上で提言がある。除雪による一般狩猟支援は有効な手法だと思うが、もうひと工夫できる。枝払いや不要なヤナギなどの小径木を倒しておくことを除雪区間の所々で行うと、倒れた木や枝にシカがたくさん集まり、捕獲効率が高くなるので検討頂きたい。

モバイルカリングを検討しているようだが、この捕獲手法は一般狩猟とあまり変わらない。もう少し努力して流し猟式 SS を行ったほうが、はるかに捕獲効率は高くなると思う。モバイルカリングと流し猟式 SS の違いは僅かである。一般狩猟者が入らないように道路を閉鎖し、餌付けを行った上で捕獲するという部分は同じである。捕獲にあたって、少数頭の群れに対してのみ発砲するという工夫をすることで捕獲効率が高まり、捕獲の持続性も高まる。発見したすべてのシカに対して発砲するモバイルカリングを実施すると、あっという間にスマートディア化するという。流し猟式 SS の実施を検討されてはどうか。

常 田：参考までに訊きたい。囲いわなの貸し出しを検討するということが、利用希望者はどのような方を想定されているか。

上 野：資料説明では触れなかったが、本シカ年度、斜里町・網走南部森林管理署・エゾシカファームの 3 者が協定を結び、三段の滝の上流の国有林において民間企業がシカを捕獲する事業を行った。その結果、4 月上旬の 10 日間で 91 頭と効率よくシカを捕獲することができた。積雪状況により時期は多少ずれるとしても、3 月下旬から 4 月上旬はシカの捕獲適期である。しかしながら、その時期は行政では予算の執行上空白期間となる（4 月上旬から契約することが難しい）という状況がある。そのような状況の中で、ある程度のコントロールが効いた形で、いくつかの捕獲手法を組み合わせたいと考えているもの。

山中委員から指摘のあった件のうち、モバイルカリングについては「モバイルカリング他」ということで検討中である。可猟区に隣接しているため、捕獲開始前から既にスマートディア化している可能性もある。いずれにせよ銃による捕獲を単発的ではなく、複数年にわたり効率よく進めていくため、関係者の意見を聞きながら、これから手法を検討していきたいと考えている。また、林道

の除雪だけでなく、シカの誘引を同時に行う方法についても検討していきたい。一部の囲いわなの誘引作業は2月から開始し、囲いわな付近に誘引されたシカを狩猟期間中にも捕獲してもらうことも考えている。シカの頭数を少しでも早く減らすよう努めていきたい。

萩原：最後がわかりにくかったので補足したい。2月で狩猟期間が終わり、3月から囲いわなで捕獲を行うつもりだが、囲いわなにシカを誘引するために2月から周囲の道路を除雪することを考えている。そうすると、その期間は除雪した道路を一般狩猟者が利用できる。そのような二重の効果も狙っている。

囲いわなの貸し出しについては、地元のシカ有効活用業者にも話をしたが感触は悪くないと思っている。さきほどの3者協定の場合は、鳥獣保護区内で有害捕獲を行ったが、行政機関はお金を一銭も使用していない。民間企業がすべて費用負担するという仕組みを作ったと言えるだろう。囲いわなの貸し出しについては、国が設置した囲いわなを民間企業が使用することにより、企業は人件費だけでシカを捕獲できる仕組みであり、民間企業が来年以降もシカが欲しいと思えば、コストを安くできる有効な手段ではないかと考えている。

宇野：この話をすると議論が長くなるが、2月で猟期が終了した後、既にスマートディア化している場所で制約を多くするとなかなか捕獲効率が上がらない。我々は地元猟友会と協力して、浜中町の既にスマートディア化しているところでモバイルカリングを行っているが、捕獲効率は低下していない。

梶座長：次の話題に移りたい。

## **議事5 エゾシカA地区（ルシャ地区）の季節移動調査等について**

- ・資料5「エゾシカA地区（ルシャ地区）の季節移動調査と検討スケジュール」を資料に基づき知床財団石名坂が説明。2.41.20
  - ✓ルシャ地区に生息するシカの季節移動や日周行動等を把握するため、平成26年6月にメス成獣4頭を捕獲してイリジウムGPS首輪と耳標を装着した。11月までに更にメス成獣6頭に標識を装着し、計10頭についてデータを収集する予定。
  - ✓ルシャ地区はヒグマが多数生息しており、シカを不動化して標識を装着する作業の際、支障の出る場所にヒグマが侵入したためヒグマを追い払うという状況が3回発生した。麻酔のかかったシカをヒグマに捕られないよう、シカの護衛が必要であった。

梶座長：この調査では非常に興味深いデータが得られることを期待している。管理対象地域（ルシャ地区）を直接どうするかという問題だけでなく、稜線の反対側のルサー相泊地区で5年間で約600頭捕獲したことに関連して、隣接する地区との間の移動の有無を検討することで、アメリカで検討されている新しいシカ管理手法、すなわち広域ではなく狭い地域の生息密度を低下させて、そのエリアの環境を維持しようという「ローカライズドマネジメント（Localized Management）」という手法が有効かどうか、という検証もできるかもしれない。質問、意見等あるか。

山中：この地域で行っているヒグマ調査について、一般向けの広報に使っているホームページのアド

レスをみなさんに今朝メーリングリストでお知らせした。ルシャ地区で常時観察されるのは 12～13 頭、時おり観察される個体を含めると 40 頭程度、相当な頭数のヒグマがここで暮らしているのは間違いない。H29 年度からの捕獲開始を検討する計画になっているが、この地域でシカを捕獲するにあたって、ヒグマに関する様々なモニタリングを実施しておく必要があると考える。この地域のクマはシカに依存して生活している。春先は衰弱したシカや死亡したシカを相当食べている。また、6 月はシカの新生仔を食べており、シカを餌として利用している。その一方、この地域でかつて春から夏までヒグマが集中して食べていた草本類は、シカの個体数が増加したことで資源量が低下している状況で、その不足を補う形でシカや漂着した海生哺乳類の死体、貝類、ヨコエビなどを食べて生活している。7～8 月中旬にかけては、食べ物となる草本類が非常に少なく、他の食べ物も少ないため、ヒグマは飢餓状態になるが、8 月中旬になりマスが遡上すると一気に体重を回復させる。非常に特異な肥満度の変化と餌の利用の仕方をしており、且つ高密度にヒグマが暮らしているのがルシャ地区である。

仮にこのルシャ地区で流し猟式 SS を行った場合、現在のシカの人や車に対する反応を考慮すると、相当高い効率での捕獲が可能と思う。一気にシカの個体数を減らした場合にどのような影響があるか。ヒグマが相当分散するのか、飢餓状態がもっと厳しくなるのか、様々なことが想定される。分散が激しくなれば、周辺の住民居住地域にも影響が及ぶ可能性もある。だからといってシカの捕獲をやめろということではなく、そのあたりをしっかりとモニタリングするべきだと考えている。シカの個体数が減れば、草本が回復して最終的にはヒグマにもメリットがある。いろいろな影響が考えられるので、モニタリングする必要があるだろう。項目として考えられるのは、ヒグマの肥満度の季節的变化、移動分散に関するモニタリング、この地域を利用するヒグマがどの程度いるかという出現率、初期死亡、糞分析によるシカへの依存度などである。現在少しずつモニタリングを実施しているが、我々の予算は平成 27 年度で終了する予定である。平成 28 年度以降、シカを捕獲しながら、植生もモニタリングしながら、何らかの事業によるヒグマのモニタリングも考えておく必要があると思う。

梶座長：ここをどのようにするかはこれからの課題である。以前に中島次長からエロージョン（土壌浸食）が起こっているという話があったが、その後の状況はどうか。

中 島：その後、私は行っていないのでわからない。

萩 原：状況はほぼ変わっていない。

梶座長：極端な例として人為的介入を行わない場所も重要だという話があったが、それをどこに設定するのか。それがルシャ地区で良いのかという問題もある。手を付ける場合はどうしたらよいのか、山中委員の指摘のようなこともあると思う。その一方で見かけ上はルシャ地区におけるシカの個体数は減っている。本当に減少しているかどうか、もう少し原因を見極める必要がある。季節移動調査も始まっており、その結果も減少した原因を考える上で参考となろう。季節移動調査等の調査データが蓄積されてきた段階で改めて検討したい。

## 議事 6 知床国立公園知床生態系維持回復事業計画の改定について

・資料 6「知床国立公園知床生態系維持回復事業計画（事務所素案）について」を資料に基づき環境省寺内が説明。

✓生態系維持回復事業は自然公園法で位置づけられている制度である。この制度で実施される事業については、その都度の許認可が不要になる。環境省や森林管理局、斜里町のしれとこ 100 平方メートル運動の事業もこの事業のひとつとして位置付けて実施してきた。

✓知床生態系維持回復事業（第 1 期）の計画期間は平成 27 年 3 月 31 日までであり、改定が必要である。第 1 期は計画期間を 5 年としていたが、今回の計画期間は目標が達成するまでとしており、計画期間を定めず作成したい。

日 浦：資料 6 の 2 ページ目、生態系維持回復事業の目標、「なお、本事業で維持又は回復を図る生態系とは、過去のある時点の静的な種構成の回復ではなく、生態的過程により変動する動的な生態系である」について、言いたいことは伝わるが、わかりにくいと思う。この一文を削除しても意図は伝わると思う。

寺 内：もともと書かれていたものを残したもの。削除しても構わない。

梶座長：これはシカの管理計画を作る際に、我々が目指すべきものは何かというコンセプトの部分である。すでに了解されていて、動いているということであれば削除しても良いかと思う。強い意見はなさそうなので削除することとしたい。他に意見はあるか。

山 中：先ほどの発言内容に関連するが、2 ページ目の生態系の状況の把握及び監視について、近い将来、ルシヤ地区で生態系維持回復事業によるシカの管理捕獲が始まるのであれば、ヒグマとの種間関係や捕食者・被（捕）食者関係をモニタリングするという一文を入れるべきだと考えるがいかがか。

寺 内：実施する可能性があることが書いてあればいいと思う。「②生態系の指標となる動物の生息状況の把握」に「哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類等の調査を行い」と書いてあり、この中でヒグマについても読めると考えている。

梶座長：そのような解釈であることを理解してもらえれば良いだろう。他にあるか。

宇 野：計画期間について、計画期間が極端に短いのもよくないが、4 ページ目に「5 年を目途に事業の効果、内容等の検証・評価を行い、本事業計画の見直しを行うこととする」と書いている。計画期間は 5 年と明示したほうが良いと思う。担当者が代わる可能性もある。知床の 5 年前を考えると、この 5 年間で大きく状況は変わっている。たとえば、第 1 期計画期間の総括の文章が入っているが、これも 5 年経つと古臭くなる。たとえば平成 25 年度の密度の数字も古臭くなるだろう。やはり計画期間は 5 年とするべきだと思う。

寺 内：生態系維持回復事業計画は長期的な観点から幅広く読めるように作っておけば十分だと考えて

いる。知床半島エゾシカ保護管理計画が5カ年毎の計画で、より具体的な内容になっているので、保護管理計画の方をしっかりと作るべきだと考えている。5カ年計画を2本平行して作ることは非効率だと思う。

山中：この計画はどちらかと言えば便宜的なものなので、あまり手間をかけずにメリットがある（許認可の手間が減る）ようにすればいいかと思う。

梶座長：同意する。知床半島エゾシカ保護管理計画の方をしっかりと作れば良いと思う。

宇野：そのようなことであれば、生態系維持回復事業計画に細かな数字は書き入れないようにしてはどうか。長期的に使用する計画と考えるのであれば、たとえば具体的な数字を書き入れず、「第一期計画期間で減らすことができた」という文言にするといったことを検討してはどうか。

梶座長：文言については宇野委員の意見を参考にして長期的に使用できるよう、事務局で文言を検討して頂きたい。事務局に一任したいと思う。

## **議事 7 その他**

・資料 7-1「エゾシカ・陸上生態系 WG 担当長期モニタリング項目の評価指標及び評価基準」を資料に基づき環境省寺内が説明。

✓長期モニタリング項目の評価指標及び評価基準については、昨年 12 月からシカ WG のメーリングリスト上で意見照会を行っていた。同時に科学委員会のメーリングリスト上でも、シカ WG 担当分を含むすべてのモニタリング項目の評価指標と評価基準の見直しについて意見照会を行っていた。シカ WG のメーリングリストで出てきたもの（黒字）に、科学委員会のメーリングリストから出てきた文言（赤字）を整合させた。

✓委員から意見を頂いて、その意見を反映させた評価指標と評価基準を作成したい。昨年度のモニタリング結果については、その評価指標と評価基準で評価したい。

宮木：植生について、資料 3 で綿密な植生指標の検討をされたが、この成果は反映されていないのか。整合性がとれていない部分がある。たとえば、モニタリング項目 No7 エゾシカの影響からの植生の回復状況調査について、見直し案では「稚樹・萌芽の発生密度、下枝被度、下層植生」とあるが、下層植生だけではあいまいである。現行のように「種数と種組成」と書く方が具体的である。資料 3 では評価指標の候補をあげているので、整合性をとったほうがいいかと思う。

寺内：下層植生の種数と種組成のイメージで書いてある。種数と種組成と書けばよいか。

宮木：ただ下層植生と書くだけでは植物全般を指すので、具体的に書いた方がよい。

寺内：了解した。

間 野：モニタリング項目No.10の評価指標、登山道沿いの踏圧状況について、登山者のインパクトを測る指標がないため入っているのだと思うが、アウトカムはどのように整理されるか教えて頂きたい。

寺 内：実は人が歩いたあとはシカもよく利用する。シカの影響も合わさった影響と考えられる。シカ道が登山道に沿ってできることもある。両方の影響を捉えることになると思う。

適正利用・エコツアーリズム検討会議でこの項目を使用して評価するものがあるため、モニタリング内容に含めているという意味もある。登山者による踏圧に関するモニタリング項目は他になく、モニタリング項目の数を増減させることは避けたいので、削除するのは難しいと考えている。

梶座長：No.12のモニタリング項目の評価基準は空欄のまま変わっていないが、「体重・体サイズ・繁殖力などの低下がみられないこと」と評価基準に追加したい。次回の会議で提示できると思うが、知床財団で長年集めてきた計測値の解析をやらせて頂いている。その結果、部分的に体が小さくなっているというデータが得られつつある。現在、管理捕獲が全国で行われている。体重が最適だが、可能であれば計測項目として後足長を記録していれば、80-90年代と比較してシカの体が大きくなった、小さくなったということがわかると思う。そうしたデータをできるだけ取って頂きたい。評価基準で「体重・体サイズ・繁殖力などの低下がみられないこと」と提案したいがどうか。

寺 内：データを詳しく見ていないため何とも言えないが、データは知床財団で整理しているのか。

石名坂：当財団や、山中委員や斜里町岡田氏が1980年代末から集めたデータを梶座長の研究室の学生さんが分析している状況である。部分的に結果は頂いているが、まだこちらでは十分に把握していない。

寺 内：データを整理されたら提示して頂きたい。よい書き振りが出来れば評価基準に記載したい。

梶座長：いつごろまでに決定する必要があるか。

寺内：明確な期限はない。今後もフレキシブルに見直しできるものと考えている。

梶座長：了解した。できるだけ早くデータの整理を行いたい。

山 中：アライグマの記載が加わったが、同じ特定外来生物のアメリカミンクの記載はしないのか。

寺 内：アメリカミンクはすでに侵入している。生態系に与えるインパクトがどの程度かということだと思う。インパクトが大きければ入れたい。注目してモニタリングする必要があるか、意見を頂きたい。

山 中：それほど高密度に生息している訳ではないと当博物館の村上学芸員は言っているが、一定の影響、特に河川の魚類へ捕食圧を与えていると思う。モニタリング項目にどこまで書けるかはわからない。

梶座長：管理する上であえて入れるべきかどうか、歴史的に定着したものについては、特に顕著でなければ管理対象にしないという外来生物法の考え方もある。

寺内：その動物種による生態系への影響、捕獲等対策の必要性があれば、書く必要性は低いと思う。

梶座長：書かない方が良いと思うが、事務局に一任する。

## **議事 7 その他**

- ・資料 7-2「鳥獣保護法の一部を改正する法律について」を資料に基づき環境省寺内が説明。0.00.10
- ✓鳥獣保護法について法改正が行われ、法の題名が「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」に変更になり、法目的に鳥獣の管理が加わった。
- ✓指定管理鳥獣捕獲等事業では、捕獲等の許可が不要となり、一定の条件下で夜間銃猟が可能となる。
- ✓鳥獣の捕獲等をする事業を実施する者は、一定の基準に適合していることについて、都道府県知事の認定（認定鳥獣捕獲等事業者の認定）を受けることが出来る。
  
- ・資料 7-3「第 5 回国際野生動物管理学会シンポジウム「知床国立公園における野生動物の保全と管理 2015」企画（案）」を資料に基づき宇野委員が説明。
- ✓知床国立公園野生動物の保全と管理シンポジウム実行委員会を平成 26 年 2 月に立ち上げて準備を進めている。
- ✓第 9 回国際哺乳類学会議が開催された 2005 年からの 10 年間の大型野生動物の保全管理のレビューを行う予定である。また、海外から専門家 3 名を招聘する予定である。

梶座長：本の出版は予定されているか。

宇 野：予定はない。基本的に PDF で、報告書までは作る予定。

山 中：予算の用途は立っていないが、知床博物館研究報告の特別号でまとめようかという構想がある。

梶座長：活字にしておくと 10 年後に何かを仕掛ける際に役に立つ。知床とイエローストンの本も残しておいて役に立った。

大泰司委員長：本として残しておくとは非常に役に立つ。PDF による報告書ではあまり利用されない可能性がある。

宇 野：実行委員会で詰めたと思う。活字には残すが、出版助成が得られない状況で印刷物として出版できるかは、今後の検討課題としたい。

梶座長：これにて会議は終了としたい。事務局にお返りする。

寺内：申し訳ないが、資料 7-1 の説明で話すべきことを失念していた。シマフクロウに関する長期モニタリング計画の項目についてメーリングリスト上で議論されていたところであるが、昨日の科学委員会でその件について議論がなされたので、報告したい。昨日の会議では、事務局からシマフクロウの保護増殖事業について一通り説明し、科学委員会での位置付けや考え方について議論して頂いた。その際、シカ WG で扱いを検討すべきだという意見があったが、梶座長からは、各 WG は科学委員会から与えられた課題について議論すべき場であり、課題が明確でない状態ではシカ WG として受けられない、という発言がされた。そのようなことで、事務局側でシマフクロウ保護増殖検討会の意見を聞きながら科学委員会での取り扱い案を整理し、今後の科学委員会で提示することとなった。

予定の時間を超過してしまい申し訳ない。長時間の議論に感謝したい。以上で会議を終了したい。